棚尾地区まちづくり事業
平成２５年１０月２３日（水）１９時～
棚尾公民館３階

第２８回　棚尾の歴史を語る会　次第

進行（小笠原幸雄）

１　前回までのテーマに関する参考意見など
大正～昭和初期の棚尾の活況、チャラボコなど

２　テーマ４９　「棚尾の消防」
⑴　説明（磯貝国雄）

⑵　出席者による補足説明、感想など

３　テーマ５０　「名倉半太郎所蔵俳句短冊集」
⑴　説明（磯貝国雄）

⑵　出席者による補足説明、感想など

４　連絡事項・情報交換など
第５回史跡めぐり　１１月３日（日）１０時　八柱神社集合
琴平社で民話の語りを聞き、防火貯水槽、道路元標をめぐる

５　次回日程
第２９回１１月２７日（水）午後７時から
「堀川の沿革」「平和用水」
第３０回１２月１９日（木）午後７時から
「青年団」「鋳物業」

テーマ４９「棚尾の消防」

１　要旨

棚尾は人家が密集している上に、かつては鋳物業、醸造業、瓦業等火を使う産業で栄えていた為、町をあげて防火に力を入れてきた。失火はあったが、類焼するような大火がなかったのはそのためと言われている。

現在、消防団は棚尾と中山地区で碧南市消防第３分団を組織している。団員は毎年１０人ずつが新しく入隊し、２年間務めた後、引き続き予備隊を３年間勤める。従って団員総数は現役２０名、予備隊３０名の合計５０名である。又、消防設備は防火貯水槽（１４箇所)、消火栓及び地区自主防災会の可搬ポンプ・消火器などがあり、火の見やぐらは防火のシンボルとして町を守り続けている。

２　碧南市制施行前の沿革

碧南市史第２巻から抜粋

棚尾では、明治３７（1904）年９月の「火防人夫簿」によれば、火防長に長田亀二郎、副に榊原彌十、火防駆付人夫として次の名簿がある。

中久根	石川八ツ五郎、榊原甚太郎、杉浦竹次郎、杉浦梅吉
堀切	大楠勝太郎、斎藤弥三郎、小笠原文治郎
屋敷	斎藤寅吉、井上栄太郎
本道	杉浦曾二郎、小笠原徳太郎、小笠原初太郎
中道	井上松五郎、小澤源治郎
畑中	小笠原十松、小笠原鉄治郎
日影	加藤鉄五郎、長田清七
西山	小澤仙松、永坂嘉太郎、鈴木安三郎、斎藤安太郎
上屋敷	杉浦徳太郎、榊原梅吉、三島好太郎
前畑	石川秋太郎
源氏	生田善太郎、小笠原嘉太郎
加須	長崎松太郎、金原重太郎
森	鈴木見太郎、辻重太郎、杉浦安太郎、鈴木仙次郎

そして、大正１０年（1921）３月１９日、２組の公設消防組織を申請している。第１部は棚尾本郷、第２部は中山で、各々５０名であった。消防の手当ては、年額２円、

出場手当ては１時間２０銭である。器具はポンプ３、纏２、提灯１００、はしご４、さす又２、斧４、鳶２０、鋸４、引倒綱２、搬水具５０、電線切断機１であった。

大正１３年（1924）棚尾村から棚尾町へ移行。この記念事業として⑴火の見櫓を木造から鉄骨製７０尺に改築した。平岩鉄工所施工。⑵手動ポンプをガソリンエンジンに替えた。

※大正１３年の「棚尾町公設消防組規則」及び「棚尾消防組人名簿」については本会のテーマ３「火の見やぐら」で掲載したので、省略する。

昭和に入り、当時の棚尾の組織は部長―伍々長―伍長―世帯という組織であったので、消防団員は各伍々長の選出範囲から代表者１人ずつを出して編成していた。昭和３年の場合は次のとおりである。

西部　小頭　永坂権一　団員：（源氏）亀島紺四郎、小林保吉（加須）井浪坂市、金原権太郎（日影）杉浦常吉（汐田）杉浦〇〇、小笠原金次郎（屋敷）斎藤勝男、斎藤勘助（中道）杉浦太市（西山）古久根正義、杉浦重太郎

南部　小頭　古久根保郎　団員：（西山）杉浦隆二、清水與一（森）内藤栄、杉浦志一、杉浦福松、永坂宇三郎、小澤定四郎（上屋敷）小澤宇三郎、三島勇次郎、小澤万次郎

東部　小頭　平岩光吉　団員：（本道）河野五郎、斎藤者婆吉（中久根）辻源治、清水竹五郎（畑中）小澤銀二郎、清水〇次郎、小笠原七十（汐田）杉浦敏一（堀切）永井清松、高橋深吉、池田儀一、岩間長太郎（屋敷）榊原愛蔵（中道）杉浦曾五郎

昭和８年小学校火災の後には、杉浦治助氏からタービン式ガソリンポンプ１台が寄附された。その後、次第に国家統制の色が濃くなり、昭和１３年（1938）警防団令が発布され、翌１４年（1939）４月１日施行された。棚尾ではそれに先がけて１３年９月２４日に家庭防護団を組織し、１４年２月２３日に警防団を設置した。

終戦後、昭和２２年（1947）５月、消防団令が発令され、２３年（1948）３月７日消防組織法が施行された。

３　碧南市制施行後の沿革

昭和２３年（1948）４月５日の市制施行と同時に消防規定を定め、旧４か町村を単位として、新川、大浜（各１１６名）棚尾、旭（各１００名）に各消防団を設け、この連絡機関として、碧南市連合消防団を設置したのである。昭和２４年（1949）４月には消防関係規則を改正し、各消防団の編成を７９人とし、新川、大浜、棚尾は各３分団、旭は２分団の計１１分団とした。

昭和２７年（1952）には碧南市消防団条例を公布し、昭和２９年（1954）３月に消防団の大改正を実施した。その内容は、連合消防団及び単位消防団を解消し、市消防団一本にし、市役所に消防本部を設けて、その下に９分団（構成人員総計２５０人）を編成した。昭和３０年（1955）４月には、西端が合併し１分団が置かれ合計１０分団になった。

昭和３６年（1961）には消防署が設置され、消防車１０台と常設消防職員１８名を配備し、３７年（1962）３月には庁舎も完成した。その後昭和４２年９月に救急車を配備して救急業務も開始した。

昭和４４（1969）年度には碧南市消防協会が発足。昭和４５（1970）年度から、消防団を５分団とし、新たに消防予備隊が５分隊設けられることになった。昭和６０年（1985）には北分署の開設。平成５年（1993）消防庁舎が港本町へ移転した。

４　消防団

⑴　碧南市消防団の組織

現在の分団割（昭和４５年以降）

第１分団（新川地区）

第２分団（大浜地区）

第３分団（棚尾地区）

第５分団（旭地区）

第６分団（西端地区）

⑵　役員名

年　度	碧南市		第３分団	
	団　長	副団長	分団長	副分団長
昭和２９・３０	磯貝国松	角谷勝正	榊原房太郎	古久根与一
３１・３２	木村政次郎	石川金三	斎藤良二	小笠原義男
３３・３４	木村政次郎 石川金三	石川金三 小栗美賀	小笠原規吉	長田正一
３５・３６	亀山正雄	小笠原義男	小澤久雄	小笠原政雄
３７・３８	石川金三	鈴木角造	榊原八十治	竹田一男
３９・４０	石川金三	鈴木角造	小笠原一元	永井貞夫
４１・４２	石川金三	鈴木角造	黒田亀治郎	石川　了
４３・４４	石橋嘉一	磯貝純一	永坂　勇	小澤重利
４５・４６	石橋嘉一	磯貝純一	小塚一雄	鈴木盛夫

昭和４７・４８	磯貝純一	黒田亀次郎	梶川　浩	三浦昇
４９・５０	磯貝純一	黒田亀次郎	杉浦正彦	小笠原宰
５１・５２	黒田亀次郎	角谷　長	斎藤邦生	鈴木勝彦
５３・５４	角谷　長	石橋源次	三島康治	竹田　厚
５５	角谷　長	石橋源次	外山康雄	長田治夫
５６	石橋源次	生田祥弘	長田治夫	長田正平
５７	石橋源次	生田祥弘	長田正平	鈴木俊夫
５８	生田祥弘	樅山善久	鈴木俊夫	斎藤太志
５９	生田祥弘	樅山善久	斎藤太志	小笠原雄一
６０	樅山善久	杉浦健次	小笠原雄一	榊原周治
６１	樅山善久	杉浦健次	榊原周治	木村孝幸
６２	杉浦健次	鈴木敏弘	木村孝幸	梶川守広
６３	杉浦健次	鈴木敏弘	梶川守広	亀島好明
平成元	鈴木敏弘	石川春久	亀島好明	永井治一郎
２	鈴木敏弘	石川春久	永井治一郎	名倉俊和
３	石川春久	石橋文良	名倉俊和	永坂信彦
４	石川春久	石橋文良	永坂信彦	生田豊彦
５	石橋文良	鈴木並生	生田豊彦	杉浦清隆
６	石橋文良	鈴木並生	杉浦清隆	生田長司
７	鈴木並生	榊原周治	生田長司	名倉慶治
８	鈴木並生	榊原周治	名倉慶治	古久根保美
９	榊原周治	田中一彦	古久根保美	石川正勝
１０	榊原周治	田中一彦	石川正勝	杉浦真行
１１	田中一彦	石橋嘉彦	杉浦真行	名倉孝昭
１２	田中一彦	石橋嘉彦	名倉孝昭	新美真司
１３	石橋嘉彦	角谷重光	新美真司	小笠原利徳
１４	石橋嘉彦	角谷重光	小笠原利徳	加瀬有貴
１５	角谷重光	藤井博司	加瀬有貴	小笠原和英
１６	角谷重光	藤井博司	小笠原和英	生田重信
１７	藤井博司	新美真司	生田重信	古久根豊
１８	藤井博司	新美真司	古久根豊	生田　智
１９	新美真司	角谷信二	生田智	永坂新太郎

平成２０	新美真司	角谷信二	永坂新太郎	生田幸浩
２１	角谷信二	岡田年弘	生田幸浩	永田　誠
２２	角谷信二	岡田年弘	永田　誠	鈴木正樹
２３	岡田年弘	杉浦栄次	鈴木正樹	石川昌樹
２４	岡田年弘	杉浦栄次	石川昌樹	鈴木雅浩
２５	杉浦栄次	長田康弘	鈴木雅浩	杉浦清貴

⑶　現在の第３分団団員

（団長）　鈴木雅浩　（副団長）杉浦清貴

（部長）　斎藤久志　生田悠

（分団員）篠原大輔、中根弘樹、榊原一弥、石川豊、服部裕哉、長田泰国、斎藤堂晴、伊園雄介、長崎良亮、名倉和騎、国松暁駿、磯部広卓、小笠原幸平、榊原勇輔

（予備隊第３分隊）

（分隊長）永田誠　（副分隊長）鈴木正樹、石川昌樹

（班長）　小笠原和幸、永坂彰啓、榊原一輝、小笠原功、生田和也

（隊員）　中村卓磨、野澤武司、今西完、石川昌孝、杉浦基文、鈴木久貴、奥谷浩平、杉浦潤、高須勝理、杉浦史晃、斎藤佑治、金原弘晃、奥谷元基、神谷英佑、荒木伴佑、光田庸人、永坂圭生、小笠原勝、鈴木栄二郎、杉浦悟志

⑷　第３部分団の装備

ア　消防ポンプ車　イスズ１６年式ＣＤ－１型　ポンプ性能Ａ２受信専用無線機付き

イ　小型動力ポンプ積載車　マツダ１８年式

ウ　軽積載、小型動力ポンプ　シバウラ　１７年式　　Ｂ３

エ　ゴムボート１艇

5　棚尾の消防設備の現状

⑴　防火貯水槽一覧表

番号	場　　所	目　　標	容　量（㎥）	建設年度など
１	源氏町５	字西山	９６	
２	棚尾本町２	字中道	１３０	昭和２６年道路内
３	弥生町５	棚尾神社	１２０	
４	源氏町４	琴平社	２８	
５	志貴町４	字堀切	１４０	道路内
６	棚尾本町２	第３分団	５０	昭和５２
７	春日町１	棚尾小学校	１００	
８	志貴崎町５	志貴崎西公園	４０	平成２
９	雨池町３	雨池防災倉庫	１００	平成２
１０	若宮町７	若宮公園	４０	平成４
１１	春日町１	南中学校	１００	平成７
１２	志貴崎町３	志貴崎公園	４０	昭和５９
１３	雨池町１	雨池公園	１００	
１４	汐田町２	堀川緑地	４７	平成１１

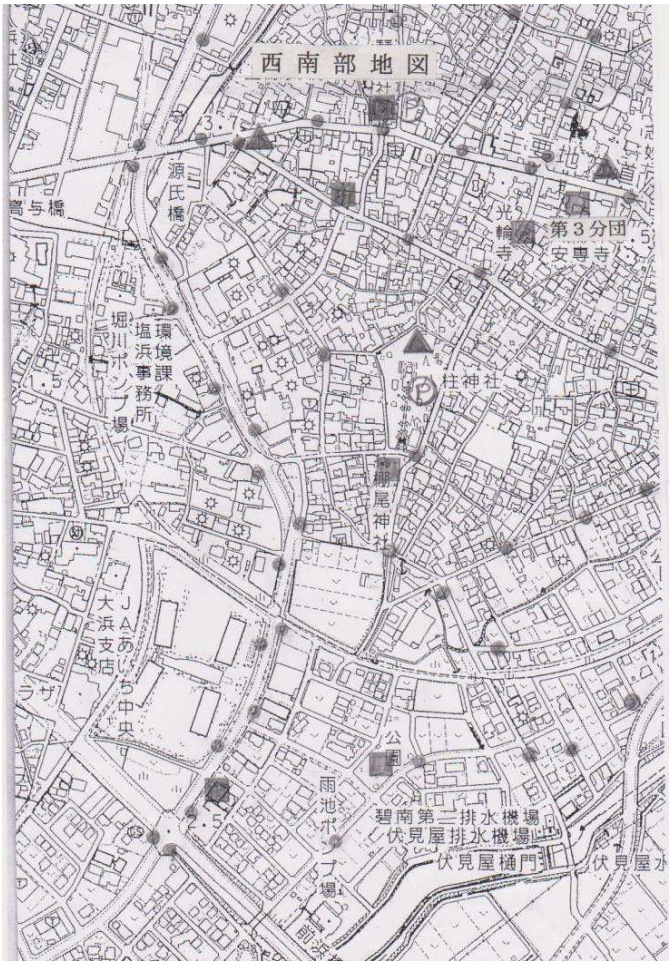
⑵　位置図

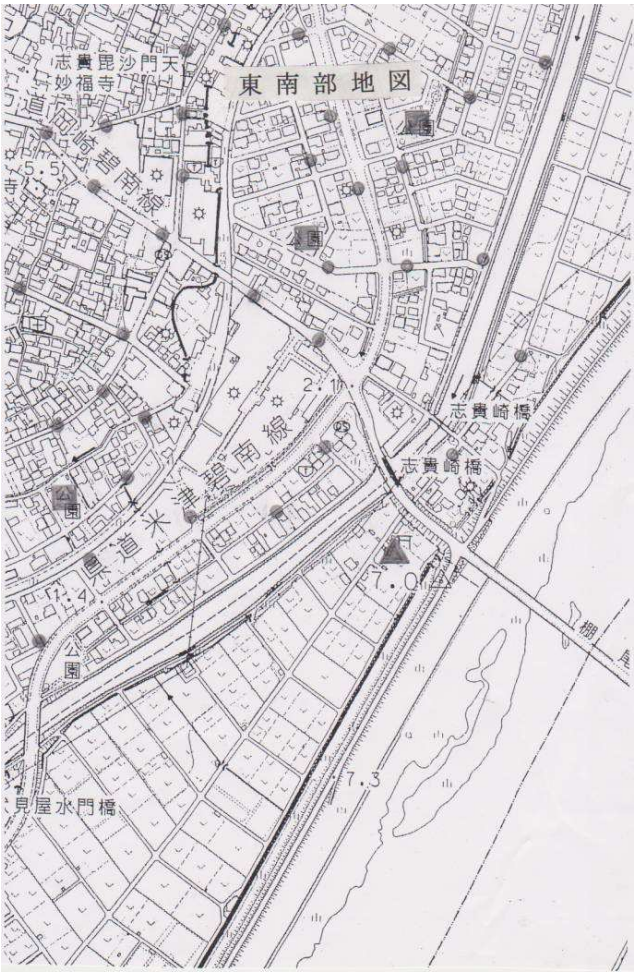
現在棚尾地区内にある防火貯水槽、火災防火の秋葉社、水道管取付けの消火栓及び自主防災会の可搬ポンプを地図４枚に分け掲載する。

棚尾の消防設備

凡　例

- 防火貯水槽
- 火災防火の秋葉社
- 水道管取付けの消火栓
- Ⓟ 自主防災会の可搬ポンプ





⑶　火災防火の秋葉社

祖先は消防設備の整備に努めるとともに、防火に対する意識を高め、生活の安全を願って防火の秋葉社をお祀りしてきた。現在も次の神社があり、棚尾のまちを守っている。

ア　八柱神社境内　秋葉社

イ　妙福寺の秋葉社常夜灯

岡崎の石工太田藤右衛門淑彦により嘉永元年（1848）に造られた。高さが６．２８ｍあり、矢作川下流域に残っている秋葉山常夜灯の中では最大規模のものある。大正１５年の写真でも、常夜灯の西にお堂があったことが分かる（※第１１回本会テーマ２０「秋葉社常夜灯」参照）。このため、八柱神社の秋葉社を南秋葉社或いは宮地秋葉社と呼び、ここを北秋葉

社或いは妙福寺秋葉社と呼んでいた。

ウ　源氏組秋葉社

旧字源氏組の人々が守り続けている。

エ　中江秋葉社

棚尾橋下にある神社で、志貴崎町内会中江の人々が守っている。

オ　汐田秋葉社

汐田町３丁目にあり、今も長田芳雅氏がお守りされている。以前は子種橋東にあり、明治４４年に社を建立し講を造り、のち十四日組と称したなどの記録がある。

6　その他お聞きした話など

⑴　以前は火災に対する意識が強く、身近で小さな池などを利用して貯水池が沢山作られた。例：汐田行者堂敷地内、保育園南、棚尾駅北踏切の西、上屋敷南部クラブの東、田ノ崎駐在所などに小規模貯水槽があった。

⑵　堀切の道路内貯水槽の建設では、当時、機械が無かったのでトロッコを穴の下まで降ろして土を運び出していたのを見た記憶がある。

⑶　戦前昭和１４年の記録では、特設自衛団棚尾警防団として「小笠原鋳造所」「平岩鉄工所」「井上鉄工所」「棚尾尋常高等小学校」が組織されている。

⑷　防火貯水槽の内、西山は昭和１６年に完成した。

⑸　小学校プール東で現在バッタの彫刻のある場所は溜め池で貯水槽の役割を果たした。

テーマ５０「名倉半太郎所蔵俳句短冊集」

１　要旨

源氏町３丁目名倉家に８代目半太郎（幼名辨治）が蒐集した俳句の短冊が保存されている。名倉家は江戸時代から庄屋を勤め、明治時代に６代目吉治郎（幼名和造）は棚尾村村長を務めた。８代目半太郎は棚尾本町２丁目に住居し、味醂製造、酒類販売の傍ら俳句などを嗜む文化人で、俳号を汴水（べんすい）と称した。

短冊集には高浜虚子など中央俳壇の著名人や永井賓水など地元で活躍した俳人の俳句が数多く残っていて、棚尾の俳句が盛んだったことがよく分かる。

２　俳句短冊集

名倉家に、短冊を挟みこんだ冊子があり、表紙に「百金荘厳帖　石道人題」と書かれている。これは俳人であった８代目名倉半太郎が蒐集、保存したものである。棚尾の俳句の隆盛を知るうえで貴重な資料と思われるので、以下紹介する。

（記述の方法）

・番号は発表のため仮に付けたものであり、実物には付いていない。

・短冊の裏面に、半太郎自身の筆による俳人の説明書きのあるものが計２６枚あるが割愛した。

・俳人の説明欄は「市制二十周年記念碧南俳句集」などによった。

(1)　春の夜は　こころの余る　〇〇〇なり　　〇〇

(2)　さミ多れや　鶏蔵で　すすまふれ　　水竹

(3)　神童　幟書くなり　午祭　　小波

巌谷小波（いわやさざなみ）：明治３年（1870）～昭和８年（1933）。東京生れ。本名季雄（すえお）別号漣山人・大江小波・楽天居。児童文学者。紫吟社・秋声会に加盟。後木曜会を主宰。

(4)　鍋祭　うたなり打ちの　神笑ふ　　四明

中川四明（なかがわしめい）：嘉永２年（1849）～大正６年（1917）。京都生れ。本名重麗。明治２９年京阪満月会を興す。

(5)　川上に　鴛鳴きて　夏近し　　鳴雪

内藤鳴雪（ないとうめいせつ）：弘化４年（1847）～大正１５年（1926）。愛媛生れ。本名素行（もとゆき。又はなりゆき）昌平学校卒。明治２５年より正岡子規の影響で俳句を学ぶ。のち「ホトトギス」を援助。

(6)　搭の下　蟇出て九輪　睨みけり　　碧梧桐

河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）：明治６年（1873）～昭和１２年（1937）。愛媛生れ。本名秉五郎（へいごろう）。旧制二高中退。正岡子規に俳句を学ぶ。

(7)　柿青々　主人がいふまゝに　家族ら　　一碧樓　　新俳句

中塚一碧樓（なかつかいっぺきろう）：明治２０年（1887）～昭和２１年（1946）。岡山生れ。本名直三。早稲田大中退。明治４１年より河東碧梧　桐選「日本俳句」に投句。

(8)　初午や　家内安全　お家○　　小澤碧堂

小澤碧堂（おざわへきどう）：明治１４年（1881）～昭和１６年（1941）。東京生れ。本名忠兵衛。１８歳より句。２０歳より河東碧梧桐に師事。

(9)　黎明到る　この月光にぬれたる二葉　　井泉　　新俳句

萩原井泉水（おぎわらせいせんすい）：明治１７年（1884）～昭和５１年（1976）。東京生れ。本名藤吉。別号愛桜など。東京大卒。中学時代に作句。明治３６年一高俳句会を興す。

(10)　冬の月　宇治川渡る　舟の中　　鬼城

村上鬼城（むらかみきじょう）：慶應元年（1865）～昭和１３年（1938）。東京生れ。本名壮太郎。高浜虚子に師事。「ホトトギス」で活躍。

(11)　己が影を　　慕うて這へる　地虫哉　　鬼城

(12)　山茶花に　又日が当たり　紅き哉　　温亭

篠原温亭（しのはらおんてい）：明治５年（1872）～大正１５年（1926）。熊本生れ。本名英喜。京都本願寺文学寮卒。明治３０年頃より作句。高浜虚子に学ぶ。

(13)　花ち可し　ちかしと雨の　夜咄しに　　知十

岡野知十（おかのちじゅう）：安政７年（1860）～昭和７年（1932）。北海道生れ。本名敬胤。別号正味。明治２８年「俳壇風聞記」を毎日新聞に連載。２９年秋声会に参加。

(14)　雪の冷　草木になきつ　閑古鳥　　露月山人

石井露月（いしいろげつ）：明治６年（1873）～昭和３年（1928）。秋田生れ。本名佑治。秋田中学中退。明治２７年正岡子規に俳句を学ぶ。

(15)　蝉しぐれ　寺借る人の　肘枕　　○○

(16)　秋晴や　起き直りたる　ははき草　　虚子

高浜虚子（たかはまきょし）：明治７年（1874）～昭和３４年（1959）。愛媛生れ。本名清。京都第三高等中学中退。正岡子規のもとに俳句を学ぶ。明治３１年より「ホトトギス」発行。

(17)　ついと来て　ついとかゝりぬ　小鳥網　　野風呂

鈴鹿野風呂（すずかのぶろ）：明治２０年（1887）～昭和４６年（1971）。京都生れ。本名登。京都大卒。大正９年「ホトトギス」初入選。高浜虚子に師事。

(18)　黙々と　巨巌に対す　秋の風　　別天楼

野田別天楼（のだべってんろう）：明治２年（1869）～昭和１９年（1944）。岡山生れ。本名要吉。明治２９年新聞「日本」の正岡子規選に初入選。大阪満月会に参加。

(19)　人が行く　春浅き野を　野をなびかせて　　別天楼

(20)　青簾　○曲指南所也　　左衛門

吉野左衛門（よしのざえもん）：明治１２年（1879）～大正９年（1920）東京生れ。本名太左衛門。東京専門学校（早稲田大）卒。国民新聞社に入り、大正初年京城日報社の社長を務め、朝鮮の俳壇にも寄与。高浜虚子に師事。

(21)　正月あきなひの　山ひくき靄　　鵜平

塩谷鵜平（しおのやうへい）：明治１０年（1877）～昭和１５年（1940）。東京専門学校（早稲田大）卒。明治３３年初めて子規庵句会に参加。後碧梧桐門下で活躍。

(22)　春眠や　さむれは夜着の　濃紫　　松濱

岡本松濱（おかもとしょうひん）：明治１２年（1879）～昭和１４年（1939）。大阪生れ。本名信。明治３２年正岡子規に俳句を学ぶ。３８年ホトトギス社に入社。

(23)　春を○む　灯にかすかな　阿○哉　　水巴

渡辺水巴（わたなべすいは）：明治１５年（1882）～昭和２１年（1946）。東京生れ。本名義（よし）。日本中学中退。明治３４年内藤鳴雪に師事。

(24)　雪ふみて　出る日の多し　冬籠　　青々

松瀬青々（まつせせいせい）：明治２年（1869）～昭和１２年（1937）。大阪生れ。本名弥三郎。明治３０年より作句。３１年新聞「日本」「ホトトギス」に投句。

(25)　ほたる呼ぶ　子に草丈の磧竹　　亜浪

臼田亜浪（うすだあろう）：明治１２年（1879）～昭和４６年（1951）。長野生れ。本名卯一郎。別号石楠・北山南水楼など。法政大卒。明治２７年俳句を始める。

(26)　ながれつゝ　ほつるゝ泡や　春の水　　○○

(27)　近つきて　影の寂たる　淡水哉　　蛇笏

飯田蛇笏（いいだだこつ）：明治１８年（1885）～昭和３７年（1962）。山梨生れ。本名武治。別号山廬（さんろ）。早稲田大中退。明治４１年高浜虚子に師事。

(28)　もの芽出て　指したる天の　真中哉　　たかし

松本たかし（まつもとたかし）：明治３９年（1906）～昭和３１年（1956）。東京

生れ。本名孝。大正１０年より高浜虚子に師事。２４歳で「ホトトギス」同人。

(29)　春暮れて　花なき庭の　落下哉　　たけし

池内たけし（いけのうちたけし）：明治２２年（1889）～昭和４９年（1974）。愛媛生れ。本名洸（たけし）。東洋協会専門学校卒。大正２年頃より作句。叔父高浜虚子に師事、「ホトトギス」入会。

(30)　千鳥一聯　見えて消えける　沖つ浪　　花蓑

鈴木花蓑（すずきはなみの）：明治１４年（1881）～昭和１７年（1942）。愛知生れ。本名喜一郎。大正７、８年頃より高浜虚子に師事、のち「ホトトギス」同人。

(31)　梅に浮く　空に心の　なしらせず　　花蓑

(32)　軒下に　麦稈つみて　○家哉　　俳小星

斎藤俳小星（さいとうはいしょうせい）：明治１５年（1882）～昭和３９年（1964）。埼玉生れ。本名徳蔵。農家として一生を終始し、土の俳句、農民俳句を提唱した。大正２年「ホトトギス」入門。富安風生、鈴木花蓑、原石鼎などと親交。

(33)　夕酒や　植え残る田も　明日一日　　さすらひ人

(34)　○貫　ただ一人の禰宜に　初詣　　一壷

三輪一壷：明治３年（1870）～昭和２５年（1950）。知立、本名関戸釛。安城農林で教壇に立つからわらホトトギスに投句。

(35)　夏山路　東尋坊へ　ひた落し　　一壷

(36)　がやがやと　郵便局も　時雨宿　　一壷

(37)　田舟よく　辷る泥田や　稲運ぶ　　一壷

(38)　日光に　さらりと白き　千鳥哉　　耿陽

岡田耿陽（おかだこうよう）：明治３０年（1897）～昭和６０年（1985）。蒲郡三谷町生れ、本名孝助。昭和５年ホトトギス課題選者。

(39)　かなしみも　又あたらしや　春の行く　　賓水

永井賓水：明治１３年（1880）～昭和３４年（1959）。本名四三郎。若宮町。ホトトギス同人、俳誌「アヲミ」を発行する。

(40)　○○○　白き淋しき　金魚哉　　意外

浅井意外：明治７年（1874）～昭和３４年（1959）。西尾生れ。本名医（ことお）。１９歳で東京に学ぶ。医師となり開業する。子規、鬼城に学ぶ。

(41)　瀧の上の　岩○か　紅葉狩　　鶏二

橋本鶏二（はしもとけいじ）：明治４０年（1907）～平成２年（1990）。三重生れ。本名英生。昭和１７年高浜虚子に師事、のち「ホトトギス」同人。

(42)　追放の　後の大音や　蚊喰鳥　　正雄

久米三汀（くめさんてい）：明治２４年（1891）～昭和２７年（1952）。長野生れ。本名正雄。東京大卒。小説家。中学時代に作句。大須賀乙字を知り新傾向に参加。昭和１０年いとう句会ほか文壇句会に参加。

(43)　沖つ辺は　驟雨かけをり　ひる寝覚　　蝶衣

高田蝶衣（たかだちょうい）：明治１９年（1886）～昭和５年（1930）。兵庫生れ。本名四十平（よそへい）。早稲田大中退。大谷繞石に俳句を学び「ホトトギス」入会、のち同人及び選者。

(44)　よしきりや　始〇城外の　かかり船　　松翁

(45)　大利根の　秋高浪に　夕栄す　　萩舟

(46)　開山に　しみじみまみえ　初詣　　賓水　（春）

(47)　書くだけは　かいておきたく　夏に籠る　　賓水　（夏）

(48)　掃苔の　序での句碑と　洗ひけり　　賓水　（秋）

(49)　労りつ　いたはれつゝ　冬ごもり　　賓水　（冬）

(50)　北風や　馬士かゝえゆく　馬の朝　　蔦堂庵

古久根蔦堂庵（こぐねちょうどうあん）：明治２０年（1887）～昭和３３年（1958）。本名喜一。明治４３年頃より高浜虚子を信奉し、松本たかしを師と仰ぎ俳道に精進。「ホトトギス」に投句。蔦堂庵の門人も多く、後進を厳しく指導した。

(51)　病中の　粛親王や　竹の秋　　青淵子

(52)　年の餅　喰うて八十五　皺深く　　仙冷舎八十五翁

(53)　語りつゝ　炉中の木の葉　拾ふなり　　明〇

(54)　炉ほとりに　寝ざめかちなる　山落葉　　明〇

(55)　落日の　山にむかひて　渡り鳥　　明〇

(56)　たかむらの　夕澄む径の　寒椿　　潔

岩田雨谷：本名潔。俳号は雨谷。明治４４年（1911）～昭和３７年（1962）。北海道函館市生まる。父の職業（船員）の関係で横浜・神戸・大阪と転々とする生活の中で、中学校を卒業し、大阪税関に奉職。後四日市税関支署に転勤する。俳句を中学校時代より好み、学校を卒業後は地域の俳人と交流を深める。戦後、大濱に来住。

(57)　木枯に　とび散るものは　鴉かな　　元麿

(58)　海越せば　ことなる俚語や　鳴く千鳥　　漁

(59)　秋風の　吹くばかりなる　山青し　　冷石

杉浦冷石：明治２９年（1896）～昭和５２年（1977）。吹上町、本名朅（たけし）。小学校の時、受持ち清水作一先生に教えられる。以後５８年作句。大正時代名古

屋で月刊俳誌「野火」を発行。戦後故郷にて月刊誌「白桃」を主宰、発行する。ホトトギス同人。

(60)　かりそめの　石の錨や　はぜの舟　　明潮

(61)　きく石や　たまちながるゝ　清水川　　冷〇

(62)　しぶ搗くに　のみ使はるゝ　古き臼　　水堂

神谷水堂：志貴町。本名政雄。昭和１３年（1933）没。２７歳。

(63)　きりの中　人あらわれて　かくれけり

(64)　露のみち　つめたきまゝまに　澄んでいる　　芳子

名倉芳子：源氏町

(65)　ひらひらと　降る月光を　掬ふ　　湖畔

杉浦湖畔：大正１２年（1923）～。札木町。本名定市、教員。昭和１５年から作句。アヲミ、ホトトギス、若葉、白桃、年輪による。

(66)　径わかれ　人わかれ行く　秋の暮れ　　徹を

角谷てつを：明治４３年（1910）～。衣料品販売。音羽町　本名哲雄　昭和９年より作句。棚尾まこも会入会。ホトトギス投句。朝日俳壇投句。

(67)　なんはんや　水の如くに　暮るゝ空　　花重

鈴木花重：明治４０年（1907）～。平七家下の人、本名重一、農協職員。アヲミ会出身、まこも会員。

(68)　三河より　能登を暑しと　宿りけり　　矢耕子

伊藤矢耕子：明治３１年（1898）～昭和５５年（1980）。平七字宮下。本名末松。明治三十一年六月十二日に生まれる。薬局を経営する傍ら俳句の世界に没入し、杉浦冷石先生につき弟子となる。俳号を矢耕子といい、また村の俳句の同好会で交流を深め、その振興に尽くした。ホトトギス系。

(69)　渡り鳥　夕焼けしたる　雲のへり　　杜童

小澤杜童：明治３６年（1903）～。若宮町。本名宇三郎、農協組合長。ホトトギス派三輪一壷に師事。岡田耿陽に学ぶ。まこも会員。

(70)　山霧は　お花畑を　昇りくる　　虹夢

斎藤虹夢：明治３７年（1904）～昭和５３年（1978）。棚尾本町。本名弘、小学校教員。アヲミ出身のちホトトギス同人。三輪一壷に師事のち岡田耿陽に学ぶ。まこも会及び白桃会員。

(71)　行く水の　しづけさにある　良夜かな　　天涯

鈴木天涯：明治３６年（1903）～昭和４６年（1971）。汐田町、本名市郎、アヲミ会員、まこも会同人ホトトギス系。

(72)　簀越し　見知らぬ顔の　こちら向く　　卓雲

杉浦卓雲：明治３７年（1904）～。平七家下。本名忠長、農協職員。アヲミ会出身、まこも会員。

(73)　茶汲女も　たちつけ着たり　紅葉山

名倉ゆき女：明治１７年（1884）～昭和１３年（1938）。名倉半太郎の母、本名ゆき、棚尾本町。アヲミ出身、ホトトギス系。

(74)　（吊句）高々と　鳴きて過ぎけり　時鳥　　賓水

(75)　（悼句）夏嵐　思はぬ枝の　折れにけり　　二九

高木二九：明治２３年（1890）～昭和５８年（1983）。棚尾本町、本名真敬、光輪寺住職。昭和１８年よりホトトギス・アヲミ同人。

(76)　（悼句）俳諧の　名をも残して　百合の花　　荷芳

鈴木荷芳：明治３８年（1905）～。棚尾本町、僧侶本名顕信。ホトトギス系アヲミ同人。

(77)　流燈の　灯を美しく　消えにけり　　萌舟

(78)　燈籠に　きびの風あり　魂迎へ　　杜童

(79)　初空の　雲映しけり　山の湖　　○草

(80)　漫々濁々　長江五千年　夢のあと　　弥○

(81)　名月や　黄鶴楼に　雁渡る　㋔

(82)　道端や　○に転げ　咲きたる○　　○○○

※(83)～(100)は短歌のため割愛する。

(101)　秋天に　法輪転ずる　如くなり　　名倉汴水

名倉汴水（なぐらべんすい）：明治４０年（1907）～昭和６３年（1988）。棚尾本町。本名半太郎、幼名辨治、酒販売業。アヲミ出身、まこも会所属。

(102)　花散りし　人のゆきしや　吉野山　　名倉汴水

(103)　茂山の　あひの煮○たや　関ヶ原　　名倉汴水